

子宮頸部の生理(1) 子宮頸部の発生と解剖

本原 剛志／片渕 秀隆

Summary

子宮頸部は、妊娠の成立や分娩に際して不可欠の重要な機能的役割を担っている。その一方で、子宮頸部には炎症性疾患やさまざまな感染症、そして腫瘍性病変など多種多様な疾患が発生する。これらの子宮頸部に関連する生理や病理について深く理解するためには、子宮頸部における発生学、解剖学、さらには組織学についての知識を横断的に統括することが重要である。

本稿では、子宮頸部の組織発生ならびにその解剖学的構造、さらにはそれらに関わる形態学的所見について解説する。

Key words

子宮頸部
組織発生
ミュラー管
エストロゲン
プロゲステロン

はじめに

子宮頸部には、炎症性疾患や腫瘍性病変などさまざまな疾患が発生する。子宮頸部を構成する上皮細胞は、月経周期や妊娠に伴う内分泌環境の変化に応じて、ダイナミックな機能的変化がみられる。その一方で、これらの上皮細胞は子宮頸癌の発生母細胞として臨床上重要視されてきた側面がある。子宮頸部に発生するさまざまな疾患を深く理解するうえで、子宮頸部の発生学を礎石とした解剖学的構造、そしてその形態学に基づく生理的機能について横断的かつ総合的に究明することの重要性は論を俟たない¹⁾。

本稿では、まず子宮頸部の組織発生について解説したあとに、その解剖学的構造について述べる。さらに、子宮頸部を構成する正常上皮の組織学的所見についても言及する。

子宮頸部の発生

女性生殖臓器のうち卵管、子宮、そして膈上部はミュラー管から発生する。中胚葉に由来するミュラー管は胎生6週頃にウォルフ管に近い尿生殖堤(urogenital ridge)の前外側面で体腔上皮が縦に陥入して生じる(図1)。このミュラー管は、エストロゲンが存在する条件下に、テストステロンならびに抗ミュラー管ホルモン(anti-Müllerian hormone; AMH)が作用しない状況において、女性の主な生殖管へと発達していく。ミュラー管は、頭側においては漏斗構造を形成

Takeshi Motohara

熊本大学大学院生命科学研究部産科婦人科学

Hidetaka Katabuchi

熊本大学大学院生命科学研究部産科婦人科学教授